

東北 VALUE SIGHT

秋 田



白川建設株式会社 代表取締役社長

白川 懸士 (しらかわ・けんじ)

1993年 明治大学商学部卒業、首都圏のゼネコンに就職。
1997年 東京理科大学工学部建築学科卒業(昼間働きながら、夜間に通学)。白川建設株式会社就職、同常務取締役役に就任。

2002年 同代表取締役社長に就任。現在に至る。
この他、株式会社あきた六次会代表取締役、本場大館きりたんぼまつり実行委員会実行委員長、大館愛購会会長などを務める。

白川建設株式会社

秋田県大館市花岡町字大森山下67番地

TEL 0186 (46) 1535 <http://www.shiraken.jp>

● 昨年10月に開催された「第43回本場大館きりたんぼまつり」は、イベント史上最多となる13万2,000人を集客した。

● 運営を担う本場大館きりたんぼまつり実行委員会の白川実行委員長は、当イベントが、「きりたんぼの“本場”大館」を全国に発信する場であると同時に、地域住民の郷土を誇りに思う気持ちを醸成する場でもあると語る。そして実行委員会の活動は、イベント運営の枠を飛び越え、地域おこしにも広がりを見せている。

本場大館きりたんぼまつり ～このまちの可能性を探る旅路～

きりたんぼの“本場”大館を内外に発信

「きりたんぼ」は秋田県を代表する食材であり、とりわけ県北部においては、お盆や正月、そして客人を迎える際の「晴れの料理」として各家庭で代々受け継がれてきた。そのきりたんぼの“本場”が当地大館である。

しかし、全国的に見れば、きりたんぼは秋田県全体の食材というイメージであり、そこに大館が本場であるというイメージはほとんどない。「本場大館きりたんぼまつり」は、きりたんぼの“本場”が大館であることを全国に発信し、ブランド化し、大館市内のきりたんぼ産業の振興を図る事によって、大館全体の発展に寄与する事を目的としている。

また、当イベントは、100を超える市内外の食・物産ブースが一同に会す食の一大イベントでもあることに加え、大館ならではの多数の体験イベントのほか、地元の小中高生の吹奏楽団や当地に縁のある芸能人のステージイベントが開催されるなど、一大エンターテインメントの場ともなっている。

会場は「ドーム」、実行委員は「若手」

当イベントは、第43回となる昨年には3日間で13万2,000人という過去最高の集客数を記録し、北東北を代表する食のイベントに成長した。しかし、来場者が10万人を超えるようになったのは、会場を樹海ドームに移した4年ほど前からのことであり、それまでは地元の長木川河川敷を会場とした、集客数1万人前後のローカルなイベントだった。

これを変えたのは、当時の商工会議所会頭、故三浦清久氏の「せっかく持っているドームを生かし、そして若い人たちの手で、本場大館きりたんぼの魅力を発信しよう」という強い思いだった。故三浦氏

のリーダーシップにより当イベントは生まれ変わった。世界最大級の木造ドームである大館樹海ドームに会場を移すことで天候に左右されることはなくなり、大会運営は安定し、店舗・集客共に大幅なスケールアップに成功した。また、それまでバラバラに活動していた青年会議所などの団体は、組織の垣根を取り払い50歳未満の若手からなる実行委員会を組織し、若手のアイデアと活力がストレートに反映される体制が整えられたのだ。

1,000人の小中高生ボランティアと共に創る「オール大館」の祭り

当イベントの運営には、大館キャリア教育の一環として約1,000人の小中高生がボランティアとして参加しており、テーブルふきや観光案内といったさまざまな係を担当して当イベントを支えてくれている。また、PTAの方々も駐車場係や賄い班などとしてかかわっており、まさに「オール大館」で創っているイベントであると言える。

小中高生たちに大館のイベントの中で一番好きなものは何かと聞くと、最も多いのが「本場大館きりたんぼ祭り」である。これは、子どもたち自身がこのイベントに貢献しているという自己有用感を感じていること、また、一生懸命に働く大人たちの背中を見ることで、彼ら彼女らが郷土を誇りに思うきっかけになっているからだと思う。

当イベントは、大館市民が「大館だってこれだけの事が出来る!」「このまちも捨てたもんじゃない」と感じ、自信を取り戻す場になっているものと自負している。

さらなる挑戦 「きりたんぼ=大館」と連想されるまでに

私が実行委員長を引き継いで最初の開催となった昨年は、県全域を巻き込むような大きなイベントがなかったことから、当イベント単独でも来場者呼び込むため、新たに5つのチャレンジを試みた。

1つ目は、ご当地アイドルプロデュース事業である。大館に縁のある女性を一般公募により募集・選考し、専門家によるボイストレーニングやダンスレッスン等で磨き上げ、市内外にお披露目したいと考えた。この事業により、地元の女子中高生9人から成る「まちあわせハチ公ガールズ」というアイドルユニットが誕生し、きりたんぼまつり当日にステージおよびCDデビューを果たした。彼女たちは、現在も各種イベントに引っ張りだこの活躍を見せている。

2つ目は、きりたんぼNo.1を決める「きりたんぼグランプリ」の開催である。これまでは反対の意見も多く開催には至っていなかったが、当地のきりたんぼが一番おいしいことを証明する必要性を感じたこと、また、メディア等から注目を浴びることにより「本場大館」を県内外に広く発信する機会にもなるだろうということから、開催に踏み切った。初代グランプリを獲得された「比内ベニヤマ荘」様と準グランプリの2社様のあわせて3社様には、本場大館きりたんぼの代表選手として、大館の観光・食文化の発信に一役買ってもらっている。

この他、当イベントと当地の産業観光を結び付けた観光事業や、きりたんぼ食材のオール大館化に向けた「ごぼう」および「こんにゃく芋」の試験栽培

事業、7月に初開催となった「肉の博覧会in大館」の3つの事業も当実行委員会で主催した。

私たち実行委員会は、「きりたんぼまつりの運営」という1カテゴリーを飛び越え、大館の可能性を探る先兵として、総合まちおこし組織に変ぼうしつつある。それもこれも、不名誉にも日本創成会議が言うところの「消滅可能性都市」に名を連ねるわがまちの現状を打破したいとの思いからである。このまちを子や孫の世代に確かな形でバトンタッチするために、われわれの世代がこのまちの可能性を探っていかなければならない。そういう意味において、実行委員会の仲間たちは、このまちの可能性を探る旅に出た同志であると思っている。

私たちは今後もさらなるチャレンジを続け、当イベントを北東北のみならず東北全体、全国を代表するようなイベントとして成長させ、「本場大館きりたんぼ」の名を広く全国に発信していきたいと強く念じているところである。



「第43回本場大館きりたんぼまつり」会場の様子(2015年10月開催、大館樹海ドームにて)